3部「非正規スパイラル」　特集 氷河期の後遺症

この貧困と向き合う連載「新貧乏物語」。4月に掲載した第3部「非正規スパイラル」では、新卒の時期がいた2000年前後に重なり、派遣社員やアルバイトで生活をしのぐ30代、40代の苦悩を取り上げた。「生まれ「自分が甘かったのかも」―。正社員への壁は高く、仕事を通じた自己実現や家庭を築く機会をつかめずに非正規雇用を広げることで人件費を削ってきた経営側からは「行きすぎてしまった」と悔やむ声も聞こえる。

んだ新・日本的経営

二〇〇〇年前後の新卒者が社会に出てから急速に広まった派遣やアルバイトなどの非正規雇用。そのきっかけとなったとされる経済団体の提言がある。

タイトルは「新時代の『日本的経営』」。バブル崩壊後の一九九五年、日本経営者団体連盟（日経連、〇二年に経済団体連合会と統合）がまとめた。人件費の削減などによる競争力の回復を提唱し、「今後の雇用形態は、正規従業員のほか、派遣社員、契約社員、パートタイム労働者などいろいろな雇用形態の人たちと共同で仕事をすることになる」と明記した。

しかし、策定に携わった当時の関係者らは、〇八年のリーマン・ショック後もさらに増え続けた非正規労働者について「想定外だった」と口をそろえる。その一人、日経連の常務理事だった成瀬健生さん(八二)は昨年一月、「新時代」の発表二十年を記念して東京で開かれたシンポジウム後のあいさつでこう述べた。

新時代の「日本的経営」　労働者を正社員などの「長期蓄積能力活用型」と、有期・短期雇用を前提とした「高度専門能力活用型」、「雇用柔軟型」の3タイプに分け、企

負の側面　労使とも想定外

成瀬健生さん

成川秀明さん

「いま提言できるなら、非正規を正規に戻していくよう訴えたい」

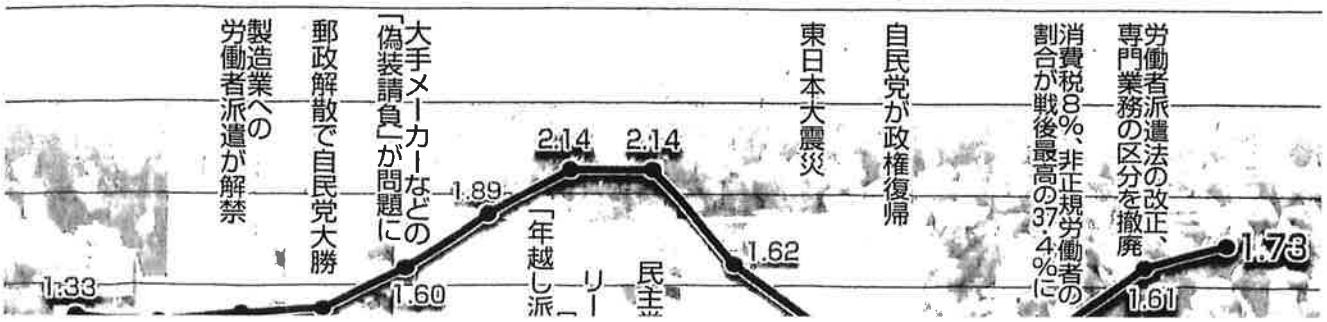
「新時代」をまとめる中心メンバーだった成瀬さんは、「バブル後の深刻な不況の中、団塊の世代が管理職になって総人件費が上がることに危機感があった」と当時を振り返る。仕事とは別の生きがいを求め、自由な働き方を選ぶ若者が増えた時代でもあった。提言に盛り込んだ非正規労働者の活用は「そんな若者たちの要求にも合致する」と思っていた。

バブル崩壊の後遺症に日本経済があえぐ中、国も急ピッチで規制緩和を進めた。九九年に労働者派遣法を改正して派遣社員の対象業務を原則自由化したほか、〇四年には製造業への派遣も解禁。企業は正社員よりも賃金が安い非正規で労働力を確保し、景気や収支を見極めながら雇用と雇い止めを繰り返していた。

総務省の統計によると、「新時代」が策定された九五年、労働者全体に占める非正規の割合は20・9%。ほぼ五人に一人だったが、一四年は戦後最高の37・4%に兆

倍率の推移

※リクルートワークス研究所調べ。求人倍率は、民間企業への就職を希望する学生1人に対する企業の求人状況から算出



（第3種郵便物認可）　中　日　新

新貧乏物語　第3部

格差がもたらす現代の貧困
「就職氷河期」と呼ばれた200
た時代が悪かった」「自分が
いる世代。一方で、非正規雇

ゆが

1995年に日経連（当時）が策定し、非正規雇用拡大のきっかけになったともいわれる提言「新時代の『日本的経営』」

能力活用型」、「雇用柔軟型」の3タイプに分け、企業は後者二つの活用によって人件費の抑制に対応すべきだとの方向性を打ち出した提言。派遣やアルバイトなどの非正規雇用を促す契機になったといわれている。

多様な雇用形態を提言 ▶▶▶▶▶▶▶▶▶ 食

全体に占める非正規の割合は2
9％。ほぼ五人に一人だったが、一四年は戦後最高の37・4％に跳ね上がり、三人に一人に増えた。わずか二十年での大きな変化に、成瀬さんは「倍にまで増えるとは予想しなかった」と率直に打ち明ける。非正規の活用には「景気回復までの緊急避難の意味合いを込めていた」という。

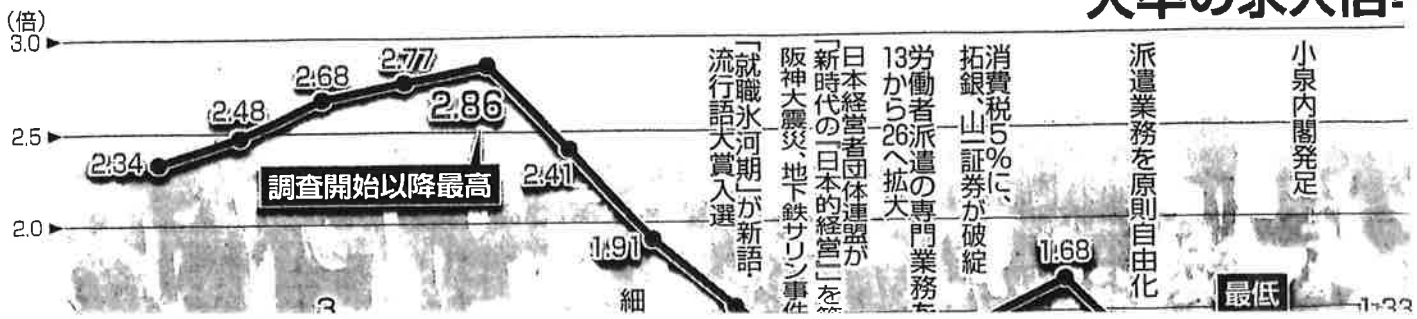
「想定外」との思いは労働者の側にもある。九五年当時、連合の労働政策局長だった成川秀明さん（七二）は「とにかく人件費を抑えようという『新時代』の内容には反論した。ただ、企業が新卒の採用を抑制することへの危機感を持つことができなかった」。

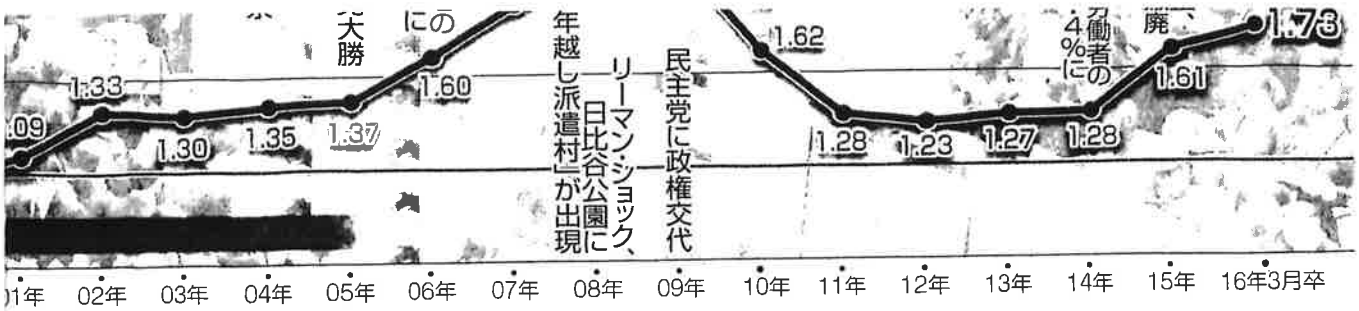
労働組合は正社員のリストラや賃下げには敏感だ。しかし、これから社会に出ようとする若者とその将来にまで、意識をきちんと向けられていたか。「結果として、格差の拡大や低収入で結婚できない人々を生み出す社会になってしまった」と悔やんでいる。

一四年の非正規労働者は全国で千九百六十二万人。うち、やむを得ず非正規で働いている「不本意非正規」が18・1％を占めている。

社会の中核を担う三十代、四十代に拡大した非正規の実態を踏まえ、成川さんは「人間や労働の価値のすべてを市場原理で測るようなことは、もうやめるべきだ」と警鐘を鳴らす。（杉藤貴浩）

大卒の求人倍率





幻想 打ち砕かれた世代

フリーターを経験　社会学者 阿部真大さん（39）

社会学者の阿部真大さん（39）は就職氷河期時代に大学を卒業。進路がなく、フリーター生活を送った経験がある。自身も含め、「はしごを外された世代」と評する三十～四十代が、貧困に追い込まれる社会的背景を語ってもらった。（栗田晃）

◆　◆　◆

僕らは団塊の世代の親たちのもと、豊かな時代に生まれてきた。子どものころ「ビックリマンチョコ」がはやったとき、おまけのシール欲しさに大量にチョコを買い、食べずに捨てる子どもたちが社会問題になったことがあった。そんなふうに欲しいものを買い与えられ、甘やかされて育った。バブル景気の中で思春期を迎え、この国に貧乏なんてないと思っていた。

ただ、いざ自分たちが社会に出ようとしたときに就職氷河期が待っていた。親を見て「大人になったら、これぐらいの生活ができる」とイメージしていたのに、実際はそれより下の生活しかできない。幻想は打ち砕かれ、ギャップに苦しむことになった。

僕自身、氷河期時代に大学院の博士課程に進めず就職活動もうまくいかなかった。それで一年間、バイク便のライダーとしてフリーター生活を送った。冬はめちゃくちゃ寒いし、夜中は眠くて事故と隣り合わせ。あの仕事をしてみたら、他がだいたい楽に見えるような過酷な仕事だった。

一年後、大学院の研究室に戻れたけれど、複数のアルバイトや非常勤講師を受け持たなければ生計が立てられなかった。二十代のころの年収は二百万円台。明日はどうなるか分からず、将来を考えると気が狂いそうになるほど不安だった。

貧困に陥った若者を「計画性がなかったからだ」と批判する人がいる。でも、そもそも計画が立てられるのは、余裕のある人。貧困の中では未来のことなんて想像もできないし、そんな余裕はない。

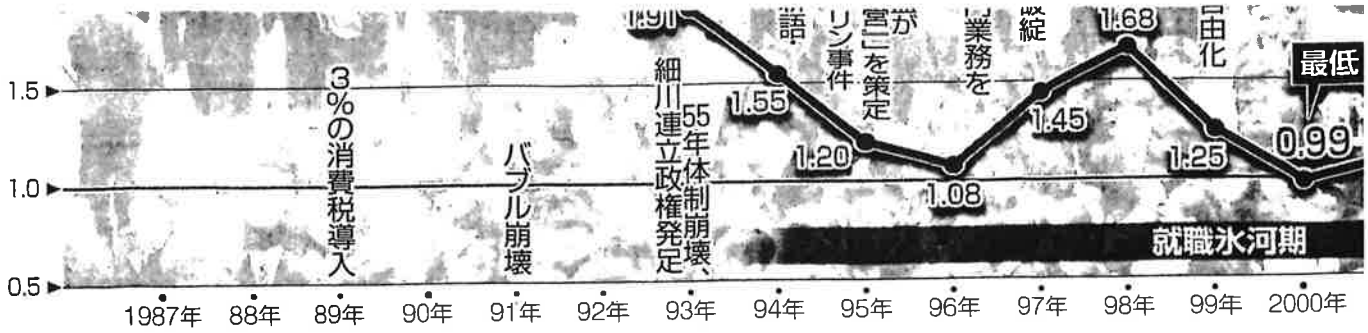
バイク便のアルバイト先では、多くの人が一生懸命に働いていた。だけど、いったん非正規のループに入ると、よっぽど専門性を身に付けない限り、抜け出せない。「真面目に働いている人でさえ、救えない国って何なのか」と憤りを感じたのが、その後の研究へのエネルギーとなった。

現代の非正規労働者たちは個別化していて、昔の工場労働者のように連帯して何かを訴えることが難しい。今の自分が悲惨だ、みじめだと考えたくないし、正当化したくなるもの。だから経営者側から見せ掛けの「やりがい」を与えられ、酷使されている。

僕らは「夢を見ろ」と教えられてきたけど、夢のあきらめ方は教えられていない。夢を打ち砕かれた人たちも生活を立て直していけるよう、国が再チャレンジの政策を整えていくべきだと思う。

「いったん非正規のループに入ると抜け出せないことが問題だ」と指摘する阿部真大さん＝神戸市東灘区の甲南大で

あべ・まさひろ　1976年10月生まれ、岐阜市出身。岐阜高、東京大をへて、現在は甲南大文学部准教授（労働社会学）。2006年、フリーター体験を基に、若者の労働問題を分析した著書「搾取される若者たち―バイク便ライダーは見た！」を発表。その他の著書に「働きすぎる若者たち」など。



「自由な働き方」に潜むリスク

意見言った途端 切り捨て

非正規雇用が若い世代に増加した背景には、会社に縛られない「多様で自由な働き方」を若者自身が好んだ側面もある。連合が昨年10月、20～40代の非正規労働者を対象にしたアンケートでは、回答者の３分の１が非正規で働く理由について「労働日時を選べるから」と答えている。

東京都内に住む男性(33)も「自由」を望んだ一人。就職氷河期の2001年春に高校を卒業後、趣味のバイクで日本中を旅する時間を求めてフリーターとして飲食店で働き始めた。正社員には「長い休みが取れない」とのイメージを抱いていたという。

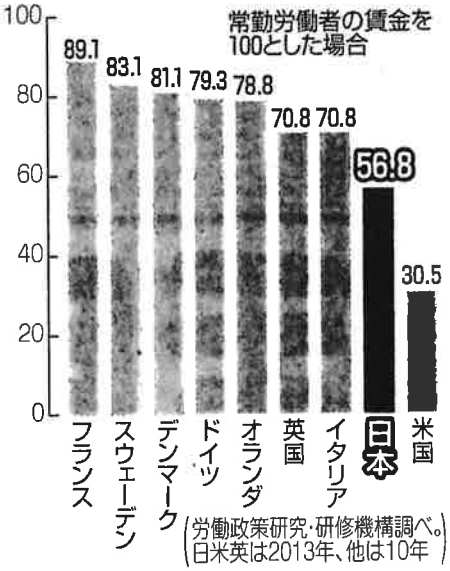
アルバイトや派遣を転々とする暮らしだが、働くこと自体は嫌いではない。全力で働いて、お金がたまると休みを取ってバイク旅行に出掛けた。東日本大震災後には、旅で世話になった東北の人の力になりたいと、現地で１カ月以上、ボランティアに励んだ。「やりたいことをやる時間がある。自分には合った働き方」と感じていた。

雲行きが変わったのは、都内の小売店で派遣社員として勤めだした2014年末。覚えがないミスを上司にとがめられ、頭をはたかれるなどの嫌がらせを受けた。３カ月ほどで我慢が限界を超え、所属している派遣会社に窮状を訴えたが、改善どころか一方的に契約打ち切りを通告された。

派遣先でのトラブルに目や耳をふさぎ、黙って働いている間は重宝されたが、意見を言った途端に切り捨てられた。「結局、単なる労働力としてしか見られていなかった」。思い悩んで心を病み、働くことができなくなって収入を失った。自由な働き方の裏に潜むリスク。30歳を過ぎた今、「会社に縛られない代わりに、失うものもたくさんある」と気付いたという。

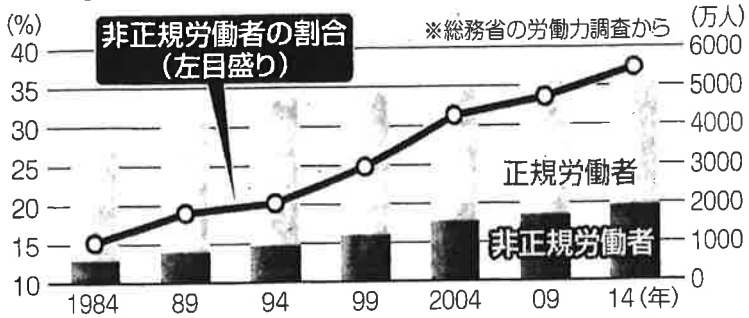
独立行政法人「労働政策研究・研修機構」によると、正社員などの常勤労働者の賃金を「100」とした場合、日本のパート労働者の賃金水準は「56.8」。データがある主要９カ国の中では、米国に次いで２番目に低い。

主な国の常勤労働者に対するパート労働者の賃金水準



（労働政策研究・研修機構調べ。日米英は2013年、他は10年）

労働者に占める非正規労働者の割合の推移



「新貧乏物語」の第3部「非正規スパイラル」は、インターネットの中日ウェブ、中日プラスでもご覧になれます。

CGデザイン・長谷川古美知　紙面構成・井深大介